

# 郷土はんのう

第30号



飯能市郷土館ミニ展示「ひなまつり」より

## 目次

- ◆『郷土はんのう』を振りかえって……坂口和子 2
- ◆特集 創刊30号記念  
『郷土はんのう』のあゆみ…………… 2
- ◆家紋の歴史……………高澤 等 5
- ◆日本文化の基層をたずねて  
—場の文化史—……………山岸敬司 6
- ◆名栗地区の文化財を訪ねる……………浅見初枝 7
- ◆飯能の仏像……………井上峰次 8
- ◆随筆 飯能祭り……………大野悦子 9
- ◆随筆 祭りいろいろ……………田嶋和子 9
- ◆郷土はんのう 5号  
武州一揆の首謀者はだれ……………新井清寿 10
- ◆郷土はんのう 4号  
郷土史かるたより……………赤田健一 11

# 「郷土はんのう」を 振りかえって

坂口和子

昭和四八年(一九七三)十二月、郷土史研究会が発会してすでに三年の歳月を数えます。「郷土はんのう」が会の研究発表誌として企画編集されたのが昭和五三年(一九七八)で、その第一号をはじめとして年一度ではあります着実に足跡をのこしてまいりました。長い先年郷土史研究会を支えてこられた先輩各位と会員の皆様のご協力に深く感謝申し上げます。

平成二二年(二〇一〇)は30号という節目にあたりますので、記録として29号までの各号誌面の目次を列挙し特集といたしました。郷土史研究会がどのような活動をってきたか、先輩方にはどんな方がおられたのか、古いページを繰るといろいろなことが想いおこされます。

創草期の熱気は誌面にも反映しているように皆様が調査研究にとりこんでおられました。郷土飯能を聞き取りたいもの、歴史解明にとりくまれた先学の方々のお姿がほうふつとしてまいります。

調査研究の緒についていた時代を思わせる板碑の論考、郷土の武人丹党の系譜の研究、武州一揆、振武軍、飯能焼、仏像、産業、城館跡、武蔵野鉄道、古民家、祭り、黒田氏と久留

里のかかわり、中山氏と高萩との交流、また各地区独自の郷土の歴史など、沢山の情報が文字になってのこされています。それは飯能市全域の歴史を実感できる生ききているふるさとの感があります。

これらの郷土への「まなざし」が市民参加による「飯能かるた」になって一九八三年に結実したのだと思います。今号に「武州一揆」と「飯能かるた」を掲載いたしましたのでご覧ください。制作当時は子どもにも大人にも人気があって「かるたとり」も行われたのですが、残念ながら現今その話をさくことはなかりません。

社会情勢がめまぐるしく変わっていく年月に、郷土に向ける関心も次第にうすれ、会員さんも減少しつつある昨今ですが、この会が今まで維持されてきたのは、飯能に暮らす私たちが、ふるさとをよき多く知り、豊かな自然のなかでふるさとを愛しつづけたかと思っているからにちがいありません。

そのようなことであれ郷土に関する情報は積極的に収集し、記録し、保存していくのがこの会の責務でありましょう。初心にかえって再々度郷土を見直し、新しき発見をしていきたいものです。郷土はんのうの目次一覧表をごらんになってお読みになりましたご希望がありましたら速慮なくお申し出ください。これも郷土史研の発展の一助であると思っております。すでに論じられたもの、発表されたものがあつてこそ研究は積

## 特集

### 創刊30号記念 「郷土はんのう」のあゆみ

み重なっていくものと信じております。益々のご協力をお願い致します。

#### 「郷土はんのう」目次から

◆創刊号(昭和53年7月)

- 表紙写真 大正6年の消防大点検(山口正子氏提供)題字揮毫・小谷野寛一
- ▽口加藤一会長 井上紋次郎 山岸雄司 新井清寿 島田欽一 本橋幹治 各氏

▽本文・四氏の研究発表

「飯能の板石塔婆」新井清寿

「飯能地方のお盆」小谷野寛一

「阿寺の和鏡」本橋幹治

「焼き物あれこれ」双木利夫

▽「各地区だより」西野長治 島田欽一 浅見徳男 井上峰次 野口正元

▽初代役員紹介 〓会長・加藤一 副会長 〓双木利夫 新井清寿 理事 〓織戸市郎 小林雅二 新井幸一

◆第2号(昭和54年8月)

表紙・明治40年ごろの飯能河原風景写真

▽本文・「白山花袋の詩「名栗川の谷」抜粋

「飯能庚申塔」平沼恒夫

「金工師寿親」細田崇能介

◆第3号(昭和56年5月)

表紙・明治40年ごろの飯能大通り写真(島田重利氏提供)

▽本文・コラム「飯能の俳句」吉良蘇月

「板石塔婆・3」新井清寿

「久留里城跡訪問記」西野長治

「飯能の俵詰」山岸雄司

「振武軍の跡を訪ねて」加藤一

◆第4号(昭和58年9月)

表紙・昭和初期の県立飯能高等女学校玄関写真

▽本文・「小瀬戸村郷土史考」野口正元

「古道を追って」丸山清

「庚申信仰の広がり」岡野達雄

「加藤一先生を悼む」新井清寿副会長(6月3日加藤初代会長逝去に伴う追悼の言葉。その後の総会で新井副会長が会長に選出された)

▽市民の応募による「飯能郷土かるた」刊行のお知らせ

◆第5号(昭和60年3月)

表紙 〓八王子車人形の舞台公演写真(西村一男氏提供) および島田欽一短歌

▽本文・「武州一揆の首謀者はだれ」新井清寿

「飯能郷土史・第一小学校編」編纂に尽力した富沢実先生を悼む 〓小谷野寛一

「雷電宮と石塚の雷神」坂口和子

「原市場の地名と屋号あれこれ」浅見茂

「飯能郷土かるた」裏話 〓赤田喜美男

「振武軍の詩」内野久喜

▽役員改選・会長・新井清寿 副会長・井上峰次 双木利夫◆第6号(昭和61年8月)

表紙||能仁寺蔵「花冠の聖観音像」写真および吉田朔夏句

▽本文・「名栗街道交通の草分け原市場の本橋藤太郎氏」西村一男

「飯能の自然、春の野草を訪ねる」横田稲吉

「古い時代を話し合う」観応会

「小谷野寛」

「石造物に籍簿への期待」坂口和子

「幼く女||飯能織物史」桑山和子

特集・郷土館建設を前に識者十五氏の提言

▽役員改選・会長・新井清寿 副会長・井上峰次 坂口和子

◆第7号(昭和62年6月)

表紙||石仏・弁財天写真

▽本文・「小瀬戸と岡部氏」野口正元

「金山物語」判野史郎

「瀧美壺の主は誰か」浅見茂

「小岩井七不思議めぐり」桑山和子

「松庚史移説記」小山誠三

「女性史小話」浅見徳男

随筆「鯉のぼり」坂口和子

◆第8号(昭和63年5月)

表紙||岩井・見光寺の宝篋印塔写真

▽本文・加治地区特集||「加治地区の歴史」西野長治

語る」新井清寿

随筆「かよい」井上峰次

◆第9号(平成元年6月)

表紙||上直竹下分・弁財天写真

▽本文・南高麗地区特集||「南高麗あれこれ」内野博司

「田安福百姓一揆・岩沢に犠牲者の墓も」吉田靖一

「八王子石灰産の創始者と歴史」師岡貞雄

「小岩の権現と竹寺へ」木村善三郎

随筆「竹に思う」大野邦弘

「飯能と木材」関根美智子

◆第10号(平成2年6月)

表紙||能仁寺蔵・伽羅観音像写真(像は五代綱吉の生母桂昌院の寄進とも伝)

▽本文・丹党の系譜と飯能」岡野達雄

「ケツあぶりの火よいつまでも」判野史郎

「飯能と堂元を訪れて」内野博司

郷土館おアプンのお知らせ 郷土館友の会発足

会長に大野邦弘氏選出

◆第11号(平成3年6月)

表紙||改築された中居宝蔵寺の全景写真

▽本文・「精明地区特集」精明地区めぐり」講師・島田欽一

「法螺洞」井上峰次

「精明見て歩き」浅見恭二

「徳ぶ喜び・比企地方めぐり」藤村美代

随筆・ある覚え書きから」吉田茂

「お茶とアメリカの独立戦争」内野博司

「比企地方の民俗」仲島公夫

◆第12号(平成4年6月)

表紙||多峰主山の黒田直邦墓写真(黒田氏は五代綱吉の側近で飯能丹党中山氏出身)

▽本文・「小岩井雅乘助と小岩井石森家」山影康洋

「一橋御領地・赤沢村の中堅農民」浅見茂

「明治八年ごろの岩沢村の産物と農家の暮らし」西野長治

「中国旅行のガイドたち」滝沢充

「随筆・川原町水天宮」富田直美

「黒田直邦をとりまく人達」岡野達雄

◆第13号(平成5年6月)

表紙||諏訪八幡神社境内の丹生明神写真

▽本文・「飯能の中世城館跡」山影康洋

「八王子城と飯能武人」青木晃平

「武蔵野鉄道開通と一丁目の発展」加藤義雄

随筆「とうかんや」相場雪枝

◆第14号(平成6年6月)

表紙||写真・幻の飯能焼き

▽本文・「高麗神社と高麗氏七不思議」吉田靖

「飯能の和紙生産」浅見徳男

「飯能の城館跡」下」山影康洋

随筆「第六天様の当番」田島和子

「飯能郷土史研究会が果から」文化ともしび賞受賞」記事

◆第15号(平成7年6月)

▽本文・「秩父の作付け植物」内野博司

「自然と歴史を訪ねて」金子仙太郎

「飯能焼を語るついで」井上峰次

「飯能焼展を終えて」尾崎泰弘

「出土品から見た飯能焼」富元久美子

◆第16号(平成8年6月)

表紙||飯能市の遺跡発掘調査の現場写真

▽本文・「文化財調査速報」柳戸信吾(市文化財学芸員)

「刀匠小次正寿を偲ぶ」岡野達雄

「山がご神体の金鑓神社」吉田靖

「御蔵神社の秋祭り」田島和子

▽役員改選・会長・井上峰次 副会長・坂口和子 岡野達雄

◆第17号(平成9年6月)

表紙||阿須に建立の万葉歌碑

▽本文・「飯能の戦前おちち物語」赤田喜美男

「大山街道考」島田欽一

「阿須地区を見学して」内野博司

「茨城県高萩市との友好にむけて」吉田靖

「館林ミニ紀行」井上峰次

◆第18号(平成10年6月)

表紙||赤田喜美男「写真集」より三点掲載

▽本文・「南高麗郷土史」発刊余話」増岡正文

「飯能戦争の犠牲者」増岡正文

〔当郷土史研究会創立に大きく貢献  
発会後も事務局として地道に活動さ  
れた歌人赤田喜美男氏の逝去にあ  
つて〕

◆第19号(平成11年3月)

表紙Ⅱ 全号十周年を迎えた飯能市郷  
土館の全号写真

▽本文・「明治維新の神仏分離と埼  
玉の現況について」大野邦弘

「こんにゃくの話」内野博司

「古文書」浅見徳男

「飯能の古民家」丸山清

「飯能十周年を迎えて」宮前幸雄(郷土  
館館長)

「小谷野寛(先生を偲んで)山川徳次  
坂口和子新会長

「当会顧問であり、民俗研究に熱心だ  
った歌人の小谷野寛一氏の逝去にあ  
つた」ほか

▽役員改選・会長・坂口和子 副会  
長・大野邦弘 内野博司 吉田靖  
理事・加藤義雄 森田伍助 関根美  
智子 西野長治 丸山清 青木晃平  
岸道生 西村一男 浅見徳男 監事・  
浅見賢治 金子仙太郎

◆第20号(平成12年3月)

表紙Ⅱ「郷土はんのう」各号写真  
(題字揮毫・小谷野寛)

▽本文 創刊20号記念「郷土はんの  
う」各号内容紹介(2頁8頁)

「飯能の刀工・小林英道」岡野達雄

「継続は力、さらなる前進を」坂口  
和子

「やきもの粘土について」岸道生

「わが家の節分風景」吉田節子  
「ふるさと漫録」出版に当たって」  
西村一男

当会のイベント紹介記事「秩父事件  
のふるさと探訪」Q子ちゃんとお  
おじさんの飯能の歴史おもしろ問答」

吉田靖「飯能郷土史研究会H11年度  
の事業報告」郷土館だより」ほか

◆第21号(平成13年3月)

表紙Ⅱ吾野村の郡城運動にかかわる  
大野嘉太郎・号鉄入揮毫の絵画・文  
写真(金子仙太郎氏提供)。題字揮  
毫・大野邦弘(以下各号)

▽本文「視界を広げよう」坂口和子  
Q子ちゃんとおおじさんの飯能の  
歴史おもしろ問答」吉田靖

「吾野村の郡城復旧ごぼればなし」  
金子仙太郎

「小瀬戸郷土史考」野口正元

「郷土の鉄道史・飯能地方の鉄道開  
設の頃」新井五助

随筆「輝いた鳥居」大野悦子  
文化財ミニ紹介「写真が語る能仁寺  
蔵・黒田直邦像」郷土史研だより」  
郷土館だより」

◆第22号(平成14年3月)

表紙Ⅱ「中山の古刹・智観寺写真  
▽本文「阿野君を憶う」井上峰次「道  
悼・岡野達雄さん」坂口和子  
「伊勢神宮道中日記簿」増岡正文  
Q子ちゃんとおおじさんの飯能歴  
史おもしろ問答」

「苗字と地名」青木晃平

「黒田氏と飯能」浅見徳男

随筆「私の家の正月」浅見初枝

「ますますの枡」田島和子  
「郷土史研だより」

◆第23号(平成15年3月)

表紙Ⅱ飯能まつりと山車写真(柳原  
雅子保存会提供)

▽本文「飯能と高萩市を結ぶ中山氏  
坂口和子

「Q子ちゃんとおおじさんの飯能お  
もしろ問答」

「飯能の古民家を調査して」丸山清

「飯能祭り」加藤義雄

随筆「郷土館のイベント」大野悦子  
「裂き織りの智恵」小沢和子

郷土史研究会新年度事業計画ほか。

◆第24号(平成16年3月)

表紙Ⅱ県指定文化財・中山信吉墓写  
真(岸道生氏提供)

▽本文「追悼・双木利夫氏」坂口和  
子

「活故知新」に寄せて：平成十五年  
の活動から」坂口和子

「Q子ちゃんとおおじさんの飯能の  
歴史おもしろ問答」

「智観寺「丹生明神」の推移」大野  
邦弘

「飯能小能家文書」武州高麗郡川寺  
村埋場一件証拠書付」について」中  
里和夫

「山仕事むかしがたり」中里吉平

「茶の品種をつくる」内野博司

随筆「七つもの思い出」田島和子  
「こもともさま：節分……」小沢和子

郷土史研究会・新年度事業計画

◆第25号(平成17年3月)

表紙Ⅱ県無形文化財・下名栗諏訪神  
社の獅子舞写真(同保存会)

▽本文「新飯能市からの展望」坂口  
和子

「大河原竜文「春すいもの草」道中記  
を中心として」中里和夫

「Q子ちゃんとおおじさんの飯能の  
歴史おもしろ問答」

「名栗のあゆみ」島田稔

「帝王切開の地・飯能」高橋通隆筆

「草もち」大野悦子

「私の家の橋」浅見初枝

平成16年度の事業活動報告ほか

◆第26号(平成18年3月)

表紙Ⅱ吾野の水力発電所跡(柳戸信  
吾氏撮影)

▽本文「猛著と和菓子」加藤実生・  
良夢

「赤沢村の宗門人別書上帳について」  
中里和夫

「カヌー工房への歩み」山田直行

「飯能・名栗の石仏」坂口和子

「飯能のまち物語博物館を中心して」  
松本英男

随筆「縁側の思い出」田島和子

「郷土館の特別展「飯能郷土史研究  
会の活動をホームページで紹介」岸  
道生

◆第27号(平成19年3月)

表紙Ⅱ県指定史跡・岩殿観音石窟奥  
之院(吾野)写真

▽本文「飯能の幕末」発刊によせ  
て」浅見徳男

「南高麗歴史散歩」久下文男

「河童の話」深堀道義

# 家紋の歴史

高澤 等

「飯能の民家建築」熊沢孝之  
 「蘇るか「高麗」の地名」吉田靖  
 随筆「高麗神社のお祭り」吉田敏子  
 「えびす講」浅見初枝  
 観音の窟解説はか

## ◆第28号（平成20年3月）

表紙「蔵原仲二郎の詩碑（天覧山麓）  
 ▽本文「歴史に学ぶ：私の歴史観」  
 吉田靖

「武田家一族のゆかりの地を訪ねて」  
 浅見初枝

「二月の雪に想う」新井五助

「浅草観音の生地岩井堂」入子助蔵

「古飯能焼と陶工としてのイッチン  
 描きの検証」岸道生

随筆「十三夜」大野悦子 「若山牧  
 水の歌碑（写真と解説）」

## ◆第29号（平成21年3月）

表紙「葬寿院八王寺（竹寺）本殿牛  
 頭天王宮と大塔婆写真」

本文「表紙によせて 十二年に一度  
 本尊牛頭天王丑年大開帳」坂口和子

「小江江佐原めぐり」浅見初枝

「飯能の山車屋台 その構造と来歴」  
 小槻成克

「私が体験した昭和初期の飯能市街  
 地」加藤義雄

「太平洋横断・米本土を目指した「気  
 球」の話」新井五助

随筆「お正月・桐の下駄」大野悦子

「白いかっぽう着」田嶋和子

「家族で百人一首」吉田敏子

郷土史研究会活動

家紋には約千年の歴史があります。平安貴族が自分の乗る牛車の目印として紋を描き、やがては家紋へと発展しました。

家紋は日本の風土の中で生まれた自然観や宗教観にはぐくまれて、世界でも例を見ない多様な価値観を習合した文化ともなりました。

カシタバミやお宝など現代では逆に厳しい社会を生き抜く力強さのシンボルとして家紋となり愛されま

取るに足らぬ雑草を題材とした家紋が貴族や武家などの支配者層から發生し、しかも同じ美的感覚と高い精神性を最下層の庶民までもが共有したというところが、現代、世界の人々が羨望する日本文化の神髄と言えるでしょう。

家紋は植物、器材、動物、文様など日常よく目にするような題材が取りあげられています。

その素材対象は三〇〇に迫り、紋形のバリエーションは数方に及びます。衣服の生地に描かれた文様は、中国から渡ってきた造形なども家紋の題材とされました。

日本人は生と死、栄華と衰亡という対極のものを二千年以上の時間の中で等しく見つめてきた民族です。

その中から生まれた日本芸術文化は「大人の文化」であるとも言われます。四季の移ろいの中に生きる日本人は、枯れ減りゆくものに対する惻隱の情を普遍的な価値観とし、「もののおわれ」に象徴される侘び寂びを根底とした情緒を重要なアイデンティティーとしてきました。

ところが家紋は目立つことを嫌う日本文化の中にあって、始めから目に留めて貰うことを命題として生まれ育った文化なのです。ですから家紋は自然風景に融するアシメトリックな日本文化とは隔絶するよう

に幾何学的な姿で存在を主張するのです。

それでも家紋が日本文化としての機軸を外さずに連続と生き続けてきた理由は、家紋が持つ意義に日本の価値観と心を織り込んできたからに他なりません。

萬紋には子孫が萬を伸ばすように榮えることを願い、常緑の橘には不老長寿を願い、鶴紋は平和のシンボルなどではなく、軍神八幡菩薩の使いとして武士に好まれ、矢羽根に用いられた鷹の羽根の家紋は武家の誇りが込められました。

すべでの家紋には間接表現で様々な願いや思いが込められ、時には権威の象徴ともなりました。

家紋が発展した契機は武家社会の成立でした。武士は自分の戦功を認めて貰うために家紋を描いた旗を掲げて戦場に臨んだのです。

そして武士達は恩賞で得た土地に

赴任し、その地名を名字としたことから、家紋文化も多様な名字と供に全国に広がってゆきました。

家紋は文字を読むことができない人が多かった時代は、一族を表す紋章として名字に等しい重要性を持っていたのです。

家紋は庶民にも自由に用いられ、紋服はもちろん嫁入り道具や、竹器、提灯などにも家紋が描かれましたが、残念ながら現代では冠婚葬祭や節句の飾りで目にする程度となつてい

ました。

戦国時代まで戦場で用いる旗に大きく描かれた家紋も、戦いの無くなつた江戸時代になると紋服に描かれることが最も多くなりました。

特に武家ではその家格に応じた礼儀作法が求められたことから、公務上や社交上でも諸氏の家紋を知り、相手にも知らせることが大変重要なことでした。

江戸時代には家紋を見聞できたことによる人違いから、熊本藩主細川宗孝が江戸城中で斬殺されるという痛ましい事件も起きます。

紋服に描かれる家紋は上絵師と呼ばれる職人によって形を整えられ、丸の中に描かれることが多くなりました。



丸に片織



中山家「枳形」に月

江戸時代には六センチ弱であったものが、時代により次第に小さくなり、現代では男性用は四センチ弱、女性用は二センチ強で描かれていました。しかしそうした小さな丸の中に描かれるようになった家紋を小さなデザインの宇宙と呼ぶ人もいます。

家紋は時の流れに身を委ねながらも、血脈と共に多くの先祖に受け継がれ、喜びの宴や悲しみの別れも見守りながら我々まで大切に伝えられてきたのです。

家紋とは自分に至るまでたくさんの人々がこの世に生きていた証しであり、また、想いの結晶体なのです。是非とも次代へと受け継いでゆきたい大切な文化です。



町のなかの家紋

例えば表札や名刺、看板などにも家紋が描かれ、街中に家紋が溢れ、また飯能祭りの日に、家紋を描いた提灯が家々の軒先に掛けられるようになれば、素敵な風物となるかも知れません。

今一度、家に依わる家紋を新鮮な気持ちで見つめ直して頂ければと思います。(日本家紋研究会副会長)

## 日本文化の基層をたずねて ―場の文化史―

山岸敬司

### ・極楽浄土

藤原摂関政治の裏側に忍び寄る時代の変革の兆し・律令制度の動搖、寺門勢力拡大と衝突、例えば東大寺門徒が興福寺に暴れ込み逆に興福寺門徒の東大寺の門の焼打、莊園制度の崩壊経過からの武士の台頭等々、度々次々時代の兆候は平安貴族の心穏やかならぬものがあつた。

そこへ末法思想のもとに1052年の末法社会到来はまさに心的混沌を窮した。貴族仏教の信仰は阿弥陀仏の世界即ち西方極楽浄土であつた。浄土往生への信仰は天台浄土教の教料となる恵心僧都源信の「往生要集」である。地獄、極楽の二元対立的思想のもとに善行を積みつつ「南無阿弥陀仏」の六字名号を唱え聖聖の来迎のもと、極楽浄土に往生することが平安貴族の浄土思想を隆盛なものとした。あの藤原道長の臨終に及んで多くの僧を身邊に侍らせ南無阿弥陀仏の合唱のもと頭を北に置き西方に顔を向け手に阿弥陀像かたの五色の糸を結び自らも「南無阿弥陀仏」と唱え往生した。詳細は「崇華物語」にある。当時は臨終往生に「堂華物語」に阿弥陀の浄土に行けるよう迎講(むかえこう)という講がいくつも催され

源信「往生要集」の出る1年前の984年頃に時の碩学慶滋保胤は中国の「浄土論」や「瑞応伝」に触発されて日本国内で浄土に往生した人物を集めて、「日本往生極楽記」を著した。聖徳太子や行基菩薩を始めとして42名の往生人を記している。因みに42名中33名が「今昔物語」に載せられている。その後「往生伝」と称する書は非常に多く出されている。その代表的なものに、大江匡房が「続本朝往生伝」を著し、三善為康が「捨遣往生伝」を著した。その後往生伝なる書は江戸時代まで続き、その書の数100冊近く及ぶと謂う。

### ・観音浄土

次に西方阿弥陀の極楽浄土ではなく観音浄土を目指した人達がいる。熊野の那智の浜から観音浄土……海の彼方の補陀落へうつば船に乗って、その船諸共に海中に沈む捨身行である。那智の浜近くに補陀落浄土と謂う。この那智の浜近くにある補陀落寺の住僧の補陀落浄土は有名である。住僧の数20人及ぶ。但し初期渡海は生きたがらであつた。その後は死後の水葬であつた。しかしこの渡海は四国土佐の室戸、足摺岬、難波四天王寺の海岸、九州には有明海などにある。貞元10年(868年)の慶龍上人が補陀落渡海の初めであるという。渡海の上人に結縁した人々が一緒に海中に沈む。その人数の多いものに12人とか18人同時渡海があつた。これも筆叢経や法華経に説かれている。

### ・即身仏

「観音浄土に再生する」という信仰にある。人間の信仰心とは何なのか。時代は少し降って江戸時代の土中入定の話をしよう。出羽三山は山形県にあり三山の一つ湯殿山をめぐる土中入定・即身仏である。注連寺や大日坊には現在でも即身仏とあがめられ祀られている。生きたがらにして土中に入り命を終える・土中入定・土中入定、称してミイラ。上記に述べた阿弥陀浄土への往生は自らの、自分の為の往生である。しかしこの土中入定は、世のため人のための捨身行であつたのだ。時の藩政による酷なる収税、天候異変に基づく早饑、飢饉、農民の生活苦、多数の餓死者。それはまさに地獄の苦しみであり人肉までも食したと当時の旅行記にある。このような危機的状況を救うために、自らを捨ける。土中入定の人達を「世行人」と呼ぶ。この「世行人」「世行人」と呼ぶ。何年勤めても僧にはなれず一生難役夫で終わる。飢えに苦しむが農民を救うため自ら潔斎して生きたがらにして土中入定しその後3年3か月経過後掘り出されて、ミイラに仕立てられたとされて祀られたのである。世の最下層にある世行人は、土中入定して最高の神になる。その人たちは例えば本明海上人、真如海上人として「海」の字を頂く。「海」は弘法大師空海の「海」の一字である。空海入定伝説におうものであろうか。

しかしながら空海は、鳥辺野の煙と化している。真言密教にある「入我々入」は一世人の即身仏実践の信的根柢をなしたものであろうか。湯殿山ミイラは現代の人々に何を語るものだろうか。

結びに、人間の持つ特異な能力・思想によって創造された世界（場と称す）

①決して生きて実体験できない西方浄土・・・阿弥陀仏の世界  
②生きながらにして求め行く海底のバラダイス・・・

③世の人々を救うため、自ら潔斎して土中に入定し神となる一世人・・・即身仏の世界

以上、日本思想史の中から特異な3つの世界（場）を取り上げた。文学・絵画・建築等広く日本の芸術文化に表れ、また民俗や習俗の中に影を落とすし、その脈々と流れる文化の深層を知ることは日本文化を理解する上で非常に大切なことと思う。

（会員）

## 名栗地区の文化財を訪ねる

浅見初枝

飯能郷土史研究会では、8月の例会に「名栗地区の文化財を訪ねる」を計画した。

8月28日午前9時30分郷土館集合。大野副会長のワゴン車と会員提供の自家用車3台に分乗し参加者23人は名栗へ出発した。

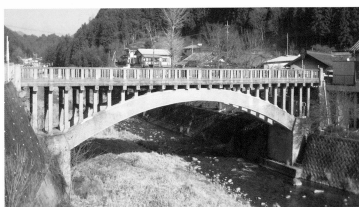
・最初の見学場所は下名栗小沢の虚空蔵堂で今回の講師名栗在住の島田稔先生が地元の話人さんとなし出向かえてくださった。先生は名栗の地名を手にとり、名栗は大きく下名栗と上名栗に分けられ、下名栗のほうが面積も狭く集落も少ない。経済の中心である森林も共有林がほとんどを占めて皆が同じような暮らし方だった。一方上名栗は広い面積の森林を個人の有力者が所有しその下に働く人が集まり、集落の数も多く財力もあり文化財も上名栗に多いと話された。

小沢のお堂には木造虚空蔵菩薩坐像が本尊として安置され、像高118センチ、寄木造、彫眼で室町時代後半の作とされ、光背、台座、宝冠等は江戸時代後半に修理されたと考えられている。小沢地区全部が見える小高い所にあり住民の手によって管理され、かつては念仏講やお祭りなどが行なわれたという。現在は18軒で毎週掃除をして守っているそうだ。

・次に上名栗の一番畷、山伏峠に向う県道から近い山中にある松木観音堂へ向った。お堂の前には石灰岩の廃棄処分された白い山ができていて観音様も居こちが悪かろう。本尊は木造千手観音立像で、像高144センチ、寄木造、彫眼で仏頭は鎌

倉時代前半、体部は室町時代後半と考えられ、何らかの事情で仏頭のみになった旧仏に、後世になって体部を補い復元したものと考えられている。堂内の天土画もすばらしいものであった。

・山を下り柏木地区の柏林寺へ行く。お堂を管理する世話人数人が待っていてくれた。県道の端に駐車。切り立った崖を登り蛇行しているため左右に名栗川を見おろす馬の背のような道を進むと平らな所へ出た。かつては寺院があったという場所にお堂が建っていた。「新編武蔵風土記稿」によると柏林寺は能仁寺であった。堂内の本尊は長谷寺式の木造十一



名栗川橋（大正13年）  
県指定建造物

面観音立像で像高88センチ、寄木造、玉眼、漆箔でできており江戸時代前期の作。

県道をさらに下って名栗湖入口近くの花畑家で昼食をとった。

・午後は再度上名栗へ。櫃沢の浅見家墓地内の小堂に安置されている木造阿弥陀如来坐像を拝見する。像高115センチ、寄木造、玉眼で漆箔をほどこし中作。浅見さんが座を聞けると太陽の光が漆箔をさらに輝かせそのまはゆきが印象的であった。本来はしかるべき伽藍の本尊として安置されていた仏像であろうということだった。隣りにある浅見家の墓地も往時の財力を思わせる立派なものであった。

・最後は白雲山鳥居観音の鳥居文庫と呼ばれる収蔵庫に納められている木造来迎阿弥陀如来立像を見学した。この仏像は県指定になっている。像高51センチ、ヒノキ材寄木造、玉眼、表面は錆下地黒漆塗りに白土・丹・金泥を重ね、着衣部に種々の税金文を施しているところ。

この収蔵庫には埼玉銀行頭取を自らも仏像を彫った平沼弥太郎のコレクションが納められており、海外からの貴重な品も数多くあった。曼荼羅の世界を現わしたような本堂の大きな仏像や天上画を拝観させていただいて見学会は無事終了した。

・寺院ではなく住民が小さなお堂を

建て、そこに仏像を安置して、身近に感じながら自分達を守ってくださるようお願いしながら敬虔に暮らした山村の人々の共同の精神と、それを守り続けてきた努力やぬくもりを感じて、一日見学会であった。

(会員・事務局)

## 飯能の仏像

井上峰次

まだまだ多くの市町村では顧みることでもなかった仏像の悉皆調査を、飯能では文化財保護審議委員会が、四年の歳月をかけて実施した。信仰の対象としてのお像を、単に文化財とか仏教の所産としてとらえ、論じ合うことは是非は別として、各寺各堂に伝わる仏像を一瞥もしないことが「是であるはずはない。盗難や事故やら続発し、仏像の所在確認をかねた戸籍調査を急ぐ必要に迫られてもいた。

実施された悉皆調査の結果、飯能の仏像は四二八体を数えた。そのあらまはは次頁の通りで、如来像・菩薩像が拮抗し、明王像がこれに続いた。仏教文化のひとつと、その広がりも垣間みることができた。寺院のあり方や、仏像の保存管理のバラツキなども、つぶさに眼にした。いづれにしてもこの調査で、仏像の所在確認とその実態に触れることができた

のは、意義深いことだった。

調査年 昭和五〇年〜五六年

(六年間)

調査対象像 四二八体

如来 一〇三軀

(釈迦28 阿弥陀39

華師29 大日7)

菩薩 一〇五軀

(聖観音33 十一面観音20

千手観音11 地藏41)

天部 一四軀

(弁財天9 毘沙門天4

吉祥天1)

明王 四〇軀

(不動明王40)

誕生仏 一〇御正体九

太子像など五 計二四軀

その他 一四二軀

国・県指定像のあらまし

一、国指定(重文)像

木造聖茶利明王像 常楽院

像高二八・八センチを測る長身

像で、その魁偉な風貌と蛇をからま

せた特異な像容に、山岳仏教の「峻厳」

がつかつた。一世紀頃の造立とい

われる。

二、県指定像

(一)鉄造阿弥陀三尊立像 福徳寺

重文の阿弥陀堂におかれるこの三

尊は、鉄の文化の華開いた鎌倉〜室

町頃の鑄造とされている。鑄肌は錯

荒れているが、金箔の残る像型はた

しか。

(二)木造地藏菩薩坐像 法光寺

至徳三年(一三八六)「託磨淨室の造立銘を内包し、「法衣垂下像」といわれる複雑な衣丈を、的確に彫出した仏師のノミの牙えに注目したい。

(三)木造華師如来坐像 常楽院

平安初期彫刻の手法をとどめる軍荼利像と相通じる立像は、楡の一木造り。頭体幹部に藤原期の雅はみられず、質朴で剛直なノミの捌きがうかがえる。

(四)木造聖観音菩薩坐像 長念寺

法光寺像に通じる法衣垂下の形式。深みのない彫刻と華麗な装飾が合わさって像容を更に際立たせている。

(五)木造来迎阿弥陀如来立像 鳥居観音

像高五一センチ、体幹部、衣文の彫出ともごく自然に現し、繁雑に流れる衲衣も深みなく処理されている。

(顧問)



木造不動明王立像 (大宇南天龍寺)



木造来迎阿弥陀如来立像 (上名栗鳥居観音)



三、飯能市指定像

西会館創造観音菩薩頭部	市	一艇	大字赤沢	昭和36.6.30
木造伝阿弥陀如来坐像	市	一艇	大字南	昭和62.4.1
木造不動明王立像	市	一艇	大字南	昭和62.4.1
木造善師如来坐像	市	一艇	大字中山	昭和62.4.1
木造阿弥陀如来坐像	市	一艇	大字中山	昭和62.4.1
木造空冠観陀如来坐像	市	一艇	大字赤沢	昭和62.4.1
木造千手観音立像	市	一艇	大字上名栗	昭和14.11.3
木造虚空蔵菩薩坐像	市	一艇	大字下名栗	平成14.11.3
木造十一面観音立像	市	一艇	大字上名栗	平成14.11.3
木造阿弥陀如来坐像	市	一艇	大字上名栗	平成16.11.3
	市	一艇	個人	

郷土はんのう

〔随筆〕

飯能祭り

大野悦子

飯能祭りといつても、市の最北端に位置する吾野では、むしろ峠を越えて花火の轟く音が聞こえてくる、秩父祭りのほうを身近に感じて暮らしている。

息子が双柳に住むようになって、孫の楓が五歳の時から山車をひくお稚児に加わるようになって四年。母親もお稚児と一緒に車について行くので、その姿をカメラに収めたり妹が生まれてからは、その子守りだったりとかと飯能祭へ関わるようになった。

ちょうど十一月三日が楓の誕生日なので、子供の出番は四時まで都合よく、そのまま爺、婆を加えて、アトラクションのように祭太鼓を遠くに関きながら、レストランでパース

ディの夕食となるのがこのところ、わが家の定番になっている。

今年は祭の日が八日に変更になった。聞くところによると、三日だと入間基地の自衛隊による、航空ショーがあるために客足がそちらに取られてしまった。祭への集まりが少なく寂しくなるかららしい。

山車などみな同じものあまり興味なく見過ごしてきたが、町内に集まる山車の数十一と聞いてびっくりした。上田知事の視察もあってか、この夏に開かれた郷土館の「ボスターでめぐるニッポンの祭り」展に刺激されてか、十一月七日の文化新聞に、その由来と共に十一台の山車が灼爛豪華にカラー写真で紹介されていたのは圧巻であった。

明治十五年に作られた原町の山車が一番古く、次に三丁目、河原町(平

成十三年に市有形民俗文化財)と続く、大正九年一丁目、二丁目(平成十二年に市有形民俗文化財)、十四年宮本町、昭和になって二二年、前田、柳原、五三年中山、平成三年に双柳、十九年本郷と、ざっと作られた年代だけを見てもその地域の歴史が感じられる。双柳などは大変美しい土地柄だった。それが近年、急に東飯能の市役所近辺に人口が増えて大分発展し、地域に余裕と勢いが出ている購入のりめぐられた鞆帳の刺繍や、購入時のいきつなど知ると一台一台にその地区の深い思い入れが語られていて興味深く感じた。

山車を持つと言うことは、水年その維持管理の可能性も問われる。後継者育成など近年この祭りごとを維持するには、地域住民のたゆまざる努力の上に成り立っているのを聞く、単純に喜んでばかりも居られないかも知れない。

双柳小学校では毎年「収穫祭」と言っ、昔の学芸会のような生徒の発表会があり、祖父母だけが招かれる行事がある。

その時に山車で踊るものを一貫して舞台で見せてもらった。小学生もおかめ、ひよっとこ、狐などに扮してその先輩達に指導されて踊る。山車の上では理解出来なかったことも、民話風の一つの物語になっていて面白く味わい深く観た覚えがある。来年は三歳になる妹の母もお稚児に加わるとのことだから、ますます

飯能祭に関わることになるだろう。(会員)

〔随筆〕

祭りいろいろ

田嶋和子

色彩豊かな「ボスター」でめぐるニッポンの祭り「展」が郷土館で開催された。

北は北海道から南は沖縄まで、西からも東からも山車やお神輿が一同に会した大騒ぎ。集まった八七点の祭りは五穀豊稔を祈願する祭礼、曳山まつり、火まつり、ちようちんまつりなど、多種多様で個性的。

かつて、テレビの画面に度々登場し、話題をまいた若手県の黒石寺蘇民祭りのボスター。厳冬期に行われる裸の男と炎の祭りだという激しき、男つばさを想像する。裸の胸毛がわいせつにあたるとして社会問題になり、JR東日本は掲示を受け入れなかったそうだ。

目を移すと、あざやかで迫力あるボスターがずらり、笛や太鼓の音が聞こえてきそう。空気が広がっている。おなかの底にひびき渡る太鼓は活力が湧いてくる力強さを感じる。大人も子どもも浮かれ、ほころぶ顔、顔が曇る祭りは平和の象徴に思える。当県の秩父地方ではさまざまな祭りが行われている。代表格の秩父夜祭り、飯田の鉄炮まつり、吉田龍勢、小泉野春まつり、秩父音頭まつりなどが展示されていた。

秩父夜祭りとは、京都祇園祭り、高山祭りとならぶ日本三大曳山まつりといわれる。豪華絢爛の山車、屋台は見応えがあり、国指定重要民俗文化財になっている貴重な祭りだ。

私が初めて夜祭りへ行ったのは半世紀近い前になる。職場の仲間と免許を取ったばかりのY君の運転で出かけた。秩父の夜は寒さがきびしく聞き、重ね着した上に赤い綿入れ半纏を羽織った。袴巻をぐるぐる巻き、たとえ転がってても中身は傷つかない過剰包装スタイルで、その頃は車で送出す機会が少なく、秩父までこのくらいかかるのかさえ見当がつかなかった。夕方の集合で出発。吾野路を走り、正九時にさしかかる。誰かが「中学のときいたヤマユリが印象に残っている。パンガローの近くに咲きはこうって」

かすかな思い出を語りつつ、まっ暗闇の山道をしばらく走った。道が荒れていらししく時々、車が飛び跳ねヒヤリッ。怖くて一刻も早く抜け出たい山道が続いた。

やがて街の明りが見え、ようやく現地へ到着。九時をまわっていたと思う。外へ出ると水を背負ったような冷気が一気に襲ってきた。当時、会場には見世物小屋がいくつも設けられ、噂のロク口首やヘビ女(一つ目小僧などの文字が目に入った)。現実にはそのような奇妙物が存在するとは思えない。おじさんが声の掛けはどうなっているのだろうか。小屋の入口で客引きのおじさんが声

を張りあげていた。「さあさあ、入って、入って。怖いもの見たさが揺れる。だが、仲間にはうす気味悪いから、私も入らなかつたが、なぞめいた見世物が流行っていた。

古い過去だが夜祭りといえ、山車の行列より、あのふしぎな小屋の光景が浮かんでくる。山の神、川の神、海の神、自然神を崇め、お祈りする行事は地域の人々によって代々引き継がれていく。私たちの暮らしには神がそと寄り添っている。そんな雰囲気は漂う数々のポスター。

(会員)

郷土はんのう5号  
武州一揆の首謀者はだれ

新井清寿

慶応二年におきた武州一揆については、日本の歴史を大きく転換させた条件として、各方面から研究されているが、その首謀者についてはまだ定説がない。

秩父市で見つかった「一揆騒動荒増見附の覚」によると、武州秩父郡上名栗村正覚寺下名栗村川又龍泉寺右二人の住持惣発徒にて一揆蜂起いたし、名栗村上下すべて百八十余り徒党を結び、大橋に南無阿弥陀仏と印し、一本は平恒世直し將軍と陀筆に印し、二流の幡を直先に押立云々

とあり、この事件首謀者は二人の僧であるとしている。

また一説には名栗村の紋次郎と豊次郎であるとも言われている。これら首謀者説に対し山の中清孝氏は「近世武州名栗村の構造」の中で「宗門人別帳によれば、正覚寺の住職大慶はその後もかわりなく記されていた。喜水項龍泉寺の住職となった竜洞悟雲大和尚が入寂したのは、明治十七年(一八八四)である」とさらに「上名栗村の寺院はすべて曹洞宗であり彼等住職が南無阿弥陀仏の旗をかかげるとは少々あやしい。」と述べている。

また日高町台の新井家の村殿し真閑日記によると「それより村続き真能寺村太郎渡世喜兵衛方にて木綿反物等出させ、各々たすき鉢巻其外幟印様のものなど仕度いたし云々」とあり、飯能市直竹の清水家の「武州百姓乱坊打口之書」によると「六月十三日之夜村々往來家々門戸をたたき立飯能町打毀すと大音に時の声をあげ掛合、夜中放銃に是非なく引連られ、様子うかがい候所、頭取とも相見え候者は、數百人余白布之襷巻いたし、白綿たすきをかけ、白旗に腕と著の印を押立」とある。

これらの資料から、名栗の二人の僧が首謀者であったというのは少々あやしくなる。それでは誰が首謀者であったのだろうか。

一揆終了後の七月に、名栗村役人から提出された報告書に紋次郎豊次郎の申し口が次のように記されている。「当五月十五日紋次郎儀飯能市場へ用事之有罷り出候ところ、飯能川原

と申す所にて、成木村寺悪徳と申す者に出合い、右悪徳申し聞かせ候は、米穀高値に付名栗道難決致すべき旨我等共へ申合せ、値下げに近々飯能川原に罷り出づく旨申し聞かせ候に付、困窮の余り其儀と存じ、掃宅の上豊治郎に申し聞かせ、当六月十三日朝、右悪徳より使いの罷る由にて、面体知れざる者三、四人罷越し、当十三日夜飯能川原に詰め合せべく、出合ざる者は後日仇をなさるべき旨断り置き、立上り候に、二人の者より右の段高声に申触れ越申候」とある。これによると成木村の悪徳な者が、飯能川原で紋次郎に働きかけ、紋次郎が同意して、豊次郎によびかけたこととなる。

それでは成木村の悪徳とはどんな人物であったのだろうか。故井上「成木村軍荼利の組頭で鈴木惣五郎」という人がいた。彼は早くから小曾木村や成木村の産物である石炭を江戸で商い、馬で江戸と成木を往復していた。彼は別名喜左衛門といひ、博徒であり「石炭徳」とも呼ばれていて、何かもめ事があるとは、彼の口さきでピタリとおさまったと言われている。

このように見てくると、悪徳は石灰商売の石炭徳であり、江戸の情況に最もくわしく、しかも組頭であれば、首謀者として最もふさわしいように思われる。その上博徒であれば仲間を使つてオルグ活動も充分にできたと思われ。それが面体の知れない者で、この面体の知れない者は

香野方面までオルグ活動をしている。事件後府中宿にて取調べを受けた者の中に無宿者が多かった。取調べの後処罰された者は喜左衛門をはじめ、紋次郎、豊次郎等数人であった。

郷土はんのう4号  
郷土史かるたより

赤田健一

郷土史を親しみやすいものにするため、本会では「郷土史かるた」を作ることになり、「ことば」を会員を中心に、「一般からも」ことばを募集してきましてが、十五人から二〇五句の応募をいただきましたので、役員中詩歌に関係ある十人による審査を行いました。歴史事象、文化財、民族の価値、地区別等を考慮に入れ補作を加えて、下記の四十四句の入選作を決定しました。



む	ら	な	ね	つ	そ	れ	た	よ	か	わ	る	ぬ	り	ち	と	へ	ほ	に	は	ろ	い
昔々の住居わたつば芦荻場	ラッパ吹きテト馬車が来た谷津の道	縄市が栄えた飯能大通り	子の権現鉄のわらじと二本杉	筒書きにその名たかめた飯能焼	総門に雲板びびく長光寺	霊亀二年高麗人が来て上総郷	高山の不動・軍荼利・大いちよう	世直しの旗押し立てた名栗谷	かたくりといかり草咲く岩井堂	われ岩の淵勝姫のものがたり	累代の勸解由の墓は能仁寺	塗りあげる直竹石灰江戸の壁	竜涯山いざ鎌倉ののろし台	秩父への正九峠つづらおり	多峰主に眠るは領主黒田直邦	平安のすがた遺して阿弥陀仏	塚だけが残る中山館跡	西川村江戸まで5日の獲うた	八王子の車人形阿彌生まれ	六道をぬけてはるかな大山へ	いかだ宿軒をつらねた川原町
古代住居址	テト馬車	縄市	子の権現	飯能焼	長光寺	高麗文化	高山不動	武州一揆	かたくり	勝姫伝説	能仁寺	直竹石灰	鎌倉街道	秩父路	黒田直邦	福徳寺	中山館	西川村	車人形	大山街道	筏宿

す	せ	も	ひ	し	み	め	ゆ	き	さ	あ	て	え	こ	ふ	け	ま	や	く	お	の	う
諏訪の森芭蕉の句碑の観音寺	浅間塚は鎌倉武士の供養塚	餅ついて女のまつりお白講	灯をともし仰ぐ観音石の厨子	神仏を合わせ茅の輪の竹の寺	見返りの坂のあたりの飯能笹	明治帝駒を留めた羅漢山	夢破れこの地に散った振武軍	汽笛のこして武威野を縫い池袋	算術と暦法の偉才千葉歳胤	青石の板碑智親寺・願成寺	天覧山果の名勝第一号	枝張って茂るタブの木滝の入	鯉ヶ久保広田うるおす用水地	ふくよかに琵琶もつ小岩井弁財天	淡水の塚塚建てた筆子たち	マンモスの化石出てきた阿須っばけ	山あいは水のきれいな和紙の里	久留里から殿様はるばる墓参り	大榎神明境内八百年	軒ごとに手織りひびいた絹の町	うまい水世にさきがけた上水道
観音寺	浅間塚	お白講	観音窟	竹寺	飯能笹	行幸寺	飯能戦争	武威野鉄道	千葉歳胤	青石塔婆	天覧山	タブの木	鯉ヶ久保池	小岩井弁財天	筆塚	阿須涯	紙すき	久留里藩	大榎	絹織物	上水道

飯能市郷土館  
ミニ展示「ひなまつり」風景



雛飾りお宝展in飯能2010の第5回展が平成22年2月23日～3月3日まで開催されました。会場は飯能市指定文化財『絹甚の店蔵』、飯能市郷土館、商店街各店、里山から街なかまでの随所、各公共施設と全市をあげて華やかなイベントがくりひろげられました。この期間飯能市への来訪者は多彩で、各所に飾られたひな人形や吊しびなを愉しんでおりました。郷土館の展示室も亨保雑をはじめ各時代の愛らしい雛人形が勢揃い、和やかで懐かしい雰囲気にも包まれました。

## 飯能郷土史研究会の活動

- ▽平成21年度事業報告  
◎総会4月25日(土)  
講演会「家紋の歴史」  
講師 高澤 等氏  
家紋・歴史研究者(日本家紋研究会副会長・会員)  
▽例会  
●6月21日(日)  
「日本文化の基層を訪ねて」  
講師 山岸敬司氏 (会員)
- 8月21日(金)  
名栗の見学会  
「名栗地区の文化財を訪ねて」  
案内 島田 稔氏 (飯能市文化財保護審議委員)
- 10月  
特展「縄文時代の飯能」  
郷土館事業に協賛  
●12月19日(土)  
「名栗村史の資料」  
講師 島田 稔氏 (名栗村史編さん委員)
- 3月31日  
郷土はんのう30号発行  
◎平成22年度事業計画  
▽総会  
4月17日(土)  
講演会  
「講談・岩殿観音靈験記」  
嘉津山鶴嘉 (田辺流)  
飯能にもあった名石工宮龜年の筆塚  
嘉津山 清 (石造物及び庭園研究者・日本石工協会理事)
- ▽例会
- 6月19日(土)  
「古代高麗郡における仏教の受容」  
講師 須田 勉氏
- 8月  
見学会 日光市周辺  
中山信吉 墓碑を中心として  
●10月  
特展「考古学からみた飯能」  
郷土館事業に協賛  
●12月18日(土)  
「飯能の経済」  
講師 加藤義雄氏 (理事)
- 平成23年2月9日(土)  
「青木氏の足跡」  
講師 吉田 靖氏 (副会長)
- 3月31日(水)  
郷土はんのう31号発行  
新会員  
市川洋太郎(東町)  
加藤 友計(南町)  
町田 湊子(上名栗)  
町田 明(下名栗)
- 計報  
深堀道義氏  
「宮沢湖の河童」の紙芝居「飯能地方のわらべうた」の例会講師をされました。謹んでご冥福をお祈り致します。
- 郷土はんのう 第三十号  
発行日 平成二十二年三月三十一日  
発行所 飯能郷土史研究会  
〒357-0121 飯能市中藤上郷四一三  
(岸道生方)  
電話九七七一〇六五四  
大野邦弘  
印刷所 (有)ビー・ユースフル